

宮野勝教授の業績と思い出

安野 智子

宮野勝先生が2022年度末をもって定年退職される。宮野先生は、1990年に設立された中央大学文学部社会情報学専攻のファウンディングメンバーであり、社会情報学専攻を30年以上にわたって支えてきた精神的支柱とも言える存在である。その宮野先生がご退職されるというものの喪失感はあまりに大きく、本音を言えばご退職をまだまだ先に延ばしていただきたいところであるが、本稿では、筆者の思い出を交えつつ、宮野先生のご業績を振り返ることで、できうる限りの謝意を示したい。

1. 宮野先生の業績

宮野先生の学究生活のご業績のすべてを論じることは、私の力の及ぶ範囲ではないが、あえて概観するとすれば、「社会的公正」に関する研究、と、「方法論」に関する研究の2つの系統に大別できるのではないだろうか。もちろん、その両者は関連しあっており、また、どちらに属するとも判断できないものもあるが、先生のご研究の根底には「公正・公平な社会をいかに築いていくか」、「そのために、民意をどのように測定していくか」という問題意識があるように見える。勝手ながら、実はこの2点は私自身の問題意識とも重なる（私が投影して見えているだけかもしれないが）。紙幅の関係で限られた点数にはなるが、ここにそのいくつかをご紹介します。

(1) 社会的公正に関する研究

宮野先生のご研究の1つの柱は「公正 (fairness)」「公平 (equity)」に関するものである。「公正」「公平」は、ほぼ同じような意味で用いられることが多いが、価値観としての「正義 (justice)」や結果としての「平等 (equality)」「不平等 (inequality)」といった概念とも関連している。宮野先生は研究者生活の初期からこの研究に着手しているが、とくに1990年代は精力的に「社会的公正」の問題に取り組んでいる。宮野先生自身がSSM調査（「社会階層と社会移動全国調査」プロジェクト）に参加されていたという理由もあるだろうし、当時の社会世相もあるだろう。1999年2月の経済戦略会議の最終答申で「過度に結果の平等を重視する日本型の社会システム」の変革が言及されたように、2000年頃からは、「公正な格差」論が日本社会で目立つようになっていたが（大沢 2003）、そもそも機会の公正・公平が担保されているのかという問題がある。たとえばジェンダーバイアスの存在やセーフティ・ネットの欠如によって、女性に不利な社会構造になっているとすれば、男女の経済格差は「公正な格差」とは言え

ないことになる。

宮野勝（1997）「公正観の論理構造」は、1995年のSSM調査を用いて、「公正」理念の規定要因を計量的に検討した研究である。この論文では、「公正」を、「過程の公正（手続公正）」と「結果の公正（分配公正）」に分けたうえで、後者をさらに「分布の公正」「配分原理の公正」に分類している。公正観を構成するものは、「現実の認知」「公正理念（理想）」「公正の判断」の3つである。1995年のSSM調査では、「どのような人が高い地位や経済的豊かさを得るのが良いか」という質問で、「実績」「努力」「必要」「平等」の中から1つを選んでもらっているので、このデータを用いて、どのような属性が「実績」及び「努力」の選択に影響しているかが検討された。ロジスティック回帰分析の結果、「努力による分配」は女性・低学歴層に選択されやすく、「実績による分配」は男性・高学歴層に選択されやすくなっていた。この結果は、社会的に有利な立場にある者が「実績による分配」を選びやすいことを示している。

同じデータを用いた宮野（2000）「公平概念はどのように形成されるのか——概念の整理と日本の位置づけ」では、公平に関する議論を整理しつつ、社会的資源の分配原理についての人々の意見を、「理想」と「現実」で比較している。1995年の時点で、日本では「努力による分配」の支持率が高い（選択率57%；対して「実績による分配」は23%）。一方、現時点ではどのような分配が優勢かと問えば、「実績による分配」（53%）が次点の「努力による分配」（19%）を大きく引き離している。つまり、「努力で分配するのが望ましい」と考える人が多い一方で、「現実には実績ベースでの分配が優勢」と認識されている。こうした結果を解釈するとき、アメリカのような競争社会と比べて、「だから日本は悪平等なのだ」というような結論に至りやすいが、国際比較データを見ると、（少なくとも1991年の調査時点においては）日本人の価値観はヨーロッパ人とは大きく異ならない。（正確に言えば、アメリカと日本の中間にヨーロッパが位置していた。）

こうした社会格差への意識は、宮野先生の政治参加や投票率の研究にも生かされていると思われる。社会的に有利な立場にある人ほど政治参加をする、というようなことが起きているならば、格差の拡大は抑制されないことになるからである。

では2020年代現在、「格差」と「公平」「公正」の現状はどうなっているのだろうか。ジニ係数の上昇やさまざまな指数をみると、「公平」「公正」の達成はさらに遠のいているように感じられる。

（2）世論調査とその方法論に関する研究

宮野先生のご研究のもう1つの柱は、「いかに正確に、あるいは妥当に、民意を測定するか」という方法論に関するものである。ヴィネット法に関する研究（例として宮野2017）など、いくつかの重要な研究があるが、その中でも筆者（安野）がもっとも重要だと考えているのが、「相対支持率」という概念である（宮野2009, 2016, 2021）。

世論調査（社会調査）に誤差はつきものではあるが、内閣支持率や政党支持率など、世論調査でよく用いられるシンプルな設問においても、マスコミ各社の数字が（ときに無視できない大きさで）異なることが近年しばしば指摘されてきた。こうしたずれがしばしば、「マスコミの調査は信用できない」というようなメディア不信につながることもある。しかし、一見大き

いように見える差は、基本的に母数をどうとるか（たとえば「無回答」を母数に入れるかどうか）という問題にすぎない——というのが宮野先生の指摘である。「無回答」を除き、何らかの意見を表明した人のうち、何%が内閣（あるいは特定の政党）を支持しているかという「相対支持率」を算出すると、一見ばらついているマスコミ各社の調査結果はぶれが少なくなるというのである。

世論調査への不信は、政策決定や民意への不信につながるおそれもある。世論調査への信頼を回復する上でも、相対支持率の概念は非常に意味のあるものと考えてる。

2. 宮野先生の思い出とお人柄

さて、宮野先生に接したことがある人であれば、その学識とお人柄に敬意を抱かずにはいられないだろう。

宮野先生の著作を改めて拝見すると、研究対象に対する真摯な姿勢がよくわかる。「ここはちょっと言いすぎだな」とか「盛っているな」というところが全くないのである。時には少し謙虚すぎるのではないかと思うくらいに抑制的だ。たとえば私は、先述した「相対支持率」という概念を、世論調査において非常に重要な知見だと思っているのだが、宮野先生は淡々と報告されるだけで、ことさらに喧伝なさない。宮野先生、これはとても重要な概念だと私は思います！

もちろん単に抑制的ということではなく、あくまでも「真摯」なのである。研究発表や学生の口頭試問などの場においても、ロジックが甘いところ、分析に問題がありそうなところは見逃されることがない。眼鏡を外して、論文を凝視しながら、穏やかな口調で、本質的な厳しい問いを寄せられるのだ。しかも恐ろしいことには、（というより相手の体面を保とうとされる配慮であろうが、）頓珍漢な返答をしてしまった時でも、それ以上問い詰めることをあまりなさない。わかっていらっしゃるのに、である。発表者としては、「これ以上議論しても無駄だと思われたのかも……」と落ち込んだとしても、宮野先生のコメントに誠実に対応すれば、必ずより良い研究になるのである。私など、宮野先生の前で研究発表をするときは、今でも緊張するくらいであるが、自分自身の研究でも、また、大学院生の研究指導でも、宮野先生の厳しくも的確なコメントに何度も救われた。まっとうなだけに厳しいコメントがあったとしても、その裏には必ず思いやりが感じられるのである。

こうした真摯さを痛感するのは、研究だけではない。会議の場でもそうだ。私などはつい、「こうあるべきではないか」という理念に先走った議論をしがちなのだが、宮野先生は常に「事実」「根拠」を求められる。穏やかな口調で、決して相手を非難したりせず、辛抱強く、ただ事実を確認される。わからないことは「わからない」と率直におっしゃるし、（そもそもそういうことは多くはないが）もし違っていたと思ったら率直にお認めになる。ネットの言論空間の影響か、「間違いを認めたら負け」というような空気が世の中に漂い始めている中で、宮野先生のように、「立場のある方が謙虚で率直である」ことがどれほど重要なことか。宮野先生がいらっしゃることで、殺伐とした議論に、冷静さが戻ってくるのである。

宮野先生のお人柄は、「教育」という、忍耐が必要な場面で一段と光っているのではないだろうか。宮野先生が担当されている「データサイエンス」という授業は、「社会統計学」とい

う旧科目名が示すとおり、統計学である。学問としての長い歴史を持つ統計学は、近年注目を浴びている「データサイエンス」と呼ばれる領域のコアの1つであり、社会学、心理学、経済学、政治学といった社会科学の諸領域でも必ず学ぶ教科とって過言ではない。しかし、数字を扱うことから、いわゆる文系の学生が敬遠しがちな授業でもある。「数字も見たくない」という学生もいるクラスを対象に、辛抱強く、統計学やデータ分析を教えることがどれほど忍耐のいることであったことか。私自身がかつて統計学を苦手とする学生だったので、なおさらその苦勞がよくわかる。しかも宮野先生のすごさは、ご退職が近くなっても、新しいツールや分析手法を取り入れていくところだ。重ね重ね、もう少し中大でご指導いただきたかったと思ってしまう。

最近でこそ世の中の潮流が変わり、「文系でもデータサイエンスを」という流れに理解が広がってきたが、しばらく前までは風当たりも強かった。「文学部の学生に統計学など無理だ」と言われたこともある。「データ分析は難しいが、必要だと思った」とか「エクセルを少しでも使いこなせるようになって嬉しい」といった感想が学生から出てくるようになったのは、本当にここ数年である。今や小学3年生の「算数」でクロス集計を学び、高校の「数学I」で回帰分析を扱うようになったが、世の中で逆風が吹いていた時代に、辛抱強く、文学部で「データサイエンス（統計学）」を教えてこられた宮野先生のご苦勞はいかばかりであったかと思う。

教育者としての宮野先生を語る上では、吉田民人先生を引き継いだ「社会情報学概論」を外すわけにはいかない。2022年度の「社会情報学概論」のシラバスには、次のようなトピックが並ぶ。

まず前期の「社会情報学概論(1)」は、専門教育の導入としての各論の紹介である。「人間と情報」セクション（第2～4回）では、「体内での情報の表現」「情報の世代間伝達」など、生物情報・遺伝情報について論じられる。続く「情報と選択」セクション（第5～7回）では、「情報の非対称性」など、「社会と情報」セクション（第8～10回）では、「社会的選択」「メディア・バイアス」などが扱われる。（第11～13回）では、「自由」「平等と公正」「真理と価値」「安全とリスク」といったトピックで、現代社会の諸問題が提示される。

後期「社会情報学概論(2)」の前半は、社会科学における「理論的思考」「科学的思考」の考え方や情報概念の考察がテーマとなっている。「概念と定義」（第1回）、「排他性・包括性」（第2回）、「批判的思考と『学問的創造の条件』」（第3回）、「自然言語と科学言語、『論じ方』」（第4回）、「科学的構成概念としての『情報』」（第5回）、「アナログ・デジタル」（第6回）、「情報の分類」（第7回）、「情報量と『情報処理』」（第8回）といった内容である。続く後半は、インターネット社会の情報リテラシーに主眼が置かれている。「新しいリテラシー」（第9回）「インターネットと情報化社会」（第10回）、「情報とセキュリティ・信頼性」（第11回）、「プログラム解明科学」・「設計科学」（第12回）、「ネットと民主主義」（第13回）、といったトピックについて論じられた後、第14回の「総括」で「社会情報学の展開」が提示される。

宮野先生の「社会情報学概論」のシラバスをここに残すのは、全国に先駆けて中央大学に設立された「社会情報学」専攻の理念が、「ソーシャル・サイエンス」にあることを記録するためである。「社会情報学」という名前の付くシラバスは全国各大学にあるが、その内容は、情報工学だったり数理モデルだったりメディア論であったり、実はさまざまである。しかし中央

大学社会情報学専攻の「社会情報学」における「柱」とは、その「どれか」ではないし、特定のトピックではない。学説の紹介でもない。仮説を立て、実証データで検証するという「ソーシャル・サイエンス」的な思考法なのである。

さて、実はこの数年、社会情報学専攻は、大変な苦難に直面していた。宮野先生にはご退職前に、ご研究に専念していただきたかったのだが、多くのご負担をおかけしてしまった。そのような中でも、宮野先生は常に穏やかに、そして論理的かつ理性的に、問題に対処されていた。その姿を、私はこれからも折に触れ、思い出すことだろう。宮野先生は私にとって、大学院時代の恩師と並ぶ「中大時代の恩師」と言える存在である。

3. 宮野先生と社会情報学専攻

最初に述べたとおり、宮野先生は1990年、社会情報学が設立されたときに、中央大学に着任された。それまで、「哲学科」の中に置かれていた社会学専攻が「社会学科」として独立する際に、当初の案では社会学科の一専攻となる予定だった社会情報学専攻も独立し、日本初の「社会情報学専攻」となったという経緯があるようだ。当時のことを、社会学専攻にいらした川崎嘉元先生が次のように記されている。

当時文学部全体の学生定員は800名であったが、他学部並みの900名にすることが悲願となっていた。石川案（安野注：社会学専攻の石川晃弘教授の案）では、学生定員100名の増員（結局は心理学専攻が20名を引き受けてくれたので新社会学科の定員増は80名で済んだ）を引き受け、その代わりに社会学科を作り、社会学科の中に社会学と社会情報学の二つのコースを置くというものであった。新設の社会情報学コースはメディア情報、数理統計情報、図書館情報の三本立てとし、図書館情報に当時文学部の中で所属が不明であった今圓子先生にいらしていただき、さらに数名の先生を增強し、最終的に二つのコースにそれぞれ6名ずつのスタッフを置くというものであった。現在の文学部人文社会学科の一学科制の下では、社会学と社会情報学は専攻としてそれぞれ独立しているが、やはりそれぞれ6名の先生がおられる。この案は、多数の学生定員を引き受けるという、いわば火中の栗を拾う覚悟の構想であったが、なんとか文学部教授会を通過し、1990年度に文学部社会学科が新設された。

川崎嘉元（2008）「石川晃弘教授の人と業績」
『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』第18号, p.3

これを見ると、社会情報学専攻は設立当初から、「メディア情報」「数理統計情報」「図書館情報」という3つの柱で構成されていたことがわかる。つまり、「数理統計」は、設立当初から重要な専攻の柱であり、それを担う人材として宮野先生が着任したわけだ。社会情報学専攻の設立から年数がたち、設立の経緯や3つの柱の存在が専攻内でも曖昧にされつつある状況なので、ファウンディングメンバーのご退職にあたり、専攻の設立当時のことは記録としてここに残しておきたい*。

設立当初の社会情報学専攻は、学生定員70名（社会学専攻は90名）であったという。教員は、「メディア情報」を1988年に着任された林茂樹先生、「数理統計情報」を宮野勝先生、「図書館情報」を今圓子（まど子）先生が担当される形で始まった。翌1991年に齊藤孝先生（記録情報学）が図書館情報の教員として着任され、さらに1992年には、東京大学を退職された吉田民人先生が招かれた。吉田先生が独自に体系化された「社会情報学」という学問領域は、社会的な事象を「情報」という科学の概念で記述することを目指しており、今なお社会情報学専攻の理論的支柱であり続けている。

こうして5名の教員でいったんの完成を見た社会情報学専攻であるが、1998年に臨時定員増が行われ、立教大学から早川善次郎先生（マスコミュニケーション論）が着任された。学生定員も80名とすることで社会情報学専攻の教員は6名体制となり、教員の交代を経つつ、現在に至っている。

2002年3月に吉田先生が退職されてからは、宮野先生が「社会情報学概論」で、吉田理論の講義を引き継がれることになった。吉田先生の社会情報学は、ウィーナーのサイバネティクスから遺伝情報、（心理学ではおなじみの）スキナーのS-R理論やプログラミングまで、人間行動を制御するシステムとしての情報概念に幅広い言及がなされており、私などは理解しようとするだけで精いっぱいである。宮野先生がご退職の後、吉田理論の理念とエッセンスを、社会情報学専攻の中にどう残し、活かしていくか、恐れ多くもポスト上は吉田先生の後任となる私としては、悩んでいるところである。

さて、宮野先生をもう1人の恩師と仰ぐ身ではあるが、実際に宮野先生の薫陶を受けたわけでは残念ながらない。「先生は優しいが、授業はレベルが高い」「体力はないとおっしゃっているが、運動神経は良いようだ」というような話を学生から聞いたことがある程度である。そこで、かつて宮野ゼミに学んだ卒業生である小宮山智志先生（新潟国際情報大学准教授）と、飯島賢志先生（熊本県立大学総合管理学部准教授）に、「思い出」を語っていただいた。ここに少しご紹介することをお許しいただきたい。

「いまから30年前ほど前、私が3年次生の時にゼミでの宮野先生のエピソードです。新聞に大学の研究者の論文の生産性を比較するとアメリカよりも日本の方が低いとの記事が掲載されていて、その原因について宮野先生に質問させていただいたことがございました。そのとき先生はとても真剣に考えてくださったことをいまでも昨日のこのように覚えております。先生は“自分の頭の使い方”はアメリカの研究者も日本の研究者も差はないが“他人の頭の使い方に差がある”と話してくださいました。

日本の研究者は自分一人で仮説を考えようとする、しかしアメリカの研究者は仮説を思いつくと周りの人にどんどん意見を求めるとのことでした。そのときは思いもよらなかったのですが、その後、私も大学でゼミを持つようになりました。自分の頭は使うことはもちろんですが、積極的に他者の頭を使うことを、学生の皆さんと試行錯誤しつつ、自分と他人の頭の使い方について、今でも考え続けています。ありがとうございます。」（小宮山智志先生）

「宮野先生の講義でのお姿は澁刺としたものがあり、先生が担当していた社会統計学の授業は、私の学部時代の大変楽しみな授業の一つであった。当時の授業内容を細かくは覚えていないが、メリハリの付いたキビキビとした授業であったという印象は残っている。(中略) 大学院の宮野ゼミは非常にハードなゼミで、それは博士前期課程のときからそうであったのだが、後期課程になって、これまで顔を出していたメンバーが減ったためか、ほぼ毎週、当時テキストにしていた統計関係の本の報告を担当することになった。前期課程のときにも増してハードであったが、現在、曲がりなりにも統計関係の授業を持つ大学教員としてやっていけているのは、この頃、苦勞して数式を読んだ経験があつてのことだと思っている。

大学院のゼミでは、非常にハードで重苦しい雰囲気であったが、ひとたび、それを離れば、宮野先生は気さくな方である。研究室を訪れたときは、こだわりと思われるコーヒーを入れてくれたり、12月の年末の頃はゼミ終わりに多摩センターで食事をともにしておごってくれたりもした。そのとき確か牛タンのおシチューを食べたのだが、牛タンがとても柔らかく美味しかったのが印象深い。(中略)

そのほか、時期が少し前後するが、私が大学院在籍時に、院生と教員の混合チームで社会学専攻 vs. 社会情報学専攻でソフトボール大会をやったことがあった。宮野先生はスポーツマンでいらっしゃり、ヒットを打てない私に氏独自のバッティング理論でご指導いただいた。おかげで確かその試合でヒットを打てたと記憶している。また守備では穏やかなソフトボールの試合であるにもかかわらず、大谷サン顔負けの矢のような送球、いや剛球を投げるので、その時、一塁を守っていた私には恐怖でしかなかった記憶がある。

そんな宮野先生も今年度をもってご退職ということで、月日の流れの早さに驚きを禁じえない。まだまだご活躍のときはあるだろうと予想するが、ひとまずこの度のご退職に際してお疲れさまでしたと申し上げたい。」(飯島賢志先生)

お忙しい中、メッセージを寄せていただいた小宮山先生、飯島先生にお礼を申し上げると同時に、宮野先生がまかれた教育の種が卒業生の方々を通して芽吹いていることを、少しでもお伝えできればと思う。宮野先生にお世話になった、感謝の言葉を伝えたい人は他にもたくさんいることだろう。50をすぎて心配ばかりおかけしている不肖の「弟子(自称)」である私としても、心からの感謝と敬意を伝えたい。

宮野先生、雑事から離れて、これからもどうぞお元気でご研究をお続けください。今後、ますますのご活躍をお祈りしております。

* なお、社会情報学専攻設立のこの経緯については、宮野勝先生と石川晃弘先生にご確認頂いている。

引用文献

- 川崎嘉元 (2008) 「石川晃弘教授の人と業績」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』18 : 1-8.
宮野勝 (1997) 「公正観の論理構造」『行動計量学』24 (1) : 48-57.
宮野勝 (2000) 「公平理念はどのように形成されるのか：概念の整理と日本の位置づけ」(海野道郎編

『日本の階層システム 2 公平感と政治意識』東京大学出版会：第 4 章所収, 85-102.)

宮野勝 (2009) 「『相对』政党支持率と『相对』内閣支持率の安定性についての試論：マスコミの世論調査の信頼性」『中央大学社会科学研究所年報』13：97-114.

宮野勝 (2016) 「相对」政党支持率と「相对」内閣支持率の安定性について—マスコミの世論調査の信頼性— (安野智子編『民意と社会』中央大学出版部 第 1 章所収, 1-23.)

宮野勝 (2017) 「ヴィネット法における提示順の効果：政治的関心を例に」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』27：63-72.

宮野勝 (2021) 「内閣支持・不支持率とメディア世論調査の信頼性—2009 年～2019 年における「その他」率と「1 回聞き」・「2 回聞き」の影響— (宮野勝編『有権者と政治』中央大学出版部 第 1 章所収, 1-28.)

大沢真理 (2003) 「格差／平等論と社会政策の改革—ジェンダー視点から」(樋口美雄・財務省財務総合政策研究所編著『日本の所得格差と社会階層』日本評論社, 第 9 章所収, 187-204.)

橋木俊詔 (2000) 『セーフティ・ネットの経済学』日本経済新聞社.